

太宰治『千代女』試論

— 獨白的兩面性 —

何 資 宜

廣島大學 社會科學研究科 博士課程前期

中文摘要

昭和十六年六月發表的『千代女』，雖然是太宰治「女性獨白體」（「女語り」）的作品之一，但由於長久以來被視為「『女性獨白體』中較不重要的作品」，因此在研究論文中極少有獨立的作品論。

目前的先行研究多將主角—「和子」定位為沒有主體性的存在，心情隨著他人的評價起伏不定。但是，這種毫無主見的人物造形在太宰的作品之中極為罕見。因此，本稿以「自我意識」為焦點進行考察，並藉由作者太宰治自身的〈芥川賞落選〉經驗加以佐證，試圖重新詮釋「和子」的人物造形。

分析手法，首先順著「和子」12歲至18歲所發生的事件分析「和子」的心理狀態。接著將太宰〈芥川賞落選〉後的心境與故事中的「和子」加以比照驗證。

經由這樣的考察後證實，「和子」雖然表面上不斷說著貶低自己的話，儼然像個〈自我不信〉的人，但事實上透過「和子」的回想，我們不難看出在「和子」的內心深處確實對自己的「文才」藏有一種〈自負〉。

故事的結尾，「和子」為了成為「女流作家」而拼命壓抑自己「空想」（「虛構」）的才能，煩惱著是否應配合當時盛興的「寫實」（見たところ感じた

ところ、そのまま書く)風潮。「和子」這樣的人物造形事實上正與三次錯過〈芥川賞〉，苦惱著是否應為了生活而隨著文壇潮流改變其寫作風格的太宰頗為相似。

如此，『千代女』乍看之下，像是述說一個「低能文學少女」因周圍大人的評價而心情起伏不定的故事。但在細細品味斟酌之後，不難發現，這篇故事的背後隱藏著一個「自我意識過剩」的「天才少女」因其自我理念與文壇風潮的不合而近乎喪失心智的身影。

關鍵詞：自我意識、空想、文壇風潮、加賀的千代女、芥川賞落選問題

太宰治「千代女」試論

— 語りの二面性をめぐって —

何 資宜

広島大学 社会科学部 博士課程前期

要 旨

昭和十六年六月に発表された「千代女」は、太宰治得意の「女語り」という手法で書かれたが、「一連の『女語り』小説のなかでもマイナーな存在」と見なされてきたため、独立した作品として論じた研究は太宰の他作に比べて数がないのが現状である。

今までの先行論は、物語の主人公である「和子」はあたかも主体性のない人物として造形されているように論じてきた。だが、このような人物設定は太宰の作品としても極めて異例であるため、本稿では「自意識」をキーワードにし、当時（昭和五年、六年以後）に流行った「生活綴方運動」・「ありのままに書く」という風潮なども視野に入れながら考察することにする。

分析手順としては、まず「和子」の十二歳から十八歳現在における出来事の順序に即して、「和子」の心理状態に注目しながら考察してみた。その結果、「和子」は〈自己不信〉という表層心理とは裏腹に、「心の隅」ではむしろ〈才能への自負〉という心理が潜んでいることを明らかにした。

さらに、本稿の最後において、作家太宰自身が体験した〈芥川賞落選問題〉なども合わせて考察した結果、昭和十三年知人への書簡における、「ウソツキ」では「生きてゆけ」ないという太宰の呟きには、「空想」（虚構）を懸命に抑えてまで「流行」

に合わせようとした「和子」の姿はが隠されていることを判明した。

このように、「千代女」は一見すると、「何にも書けない低能の文学少女」が周囲の大人たちに振り回されているように見えるが、その裏にはむしろ逆に、「自意識過剰」な「天才少女」が「文壇常識」により「気が狂ふ」ほどに悩んだあげく、自分の思い（「空想」）を圧殺するまでの姿が物語られているように思われる。

キーワード：自意識、空想、「ありのまま」という風潮、加賀の千代女、
芥川賞落選問題

Dazai Osamu's Fiction---*Tiyo*

—The dualism of monologue—

Tzo I Ho

Postgraduate Institute of Social Science, Hiroshima University

Abstract

Among Dazai's works of "Woman Monologue", *Tiyo*, which was published in June, 1941, has been being regarded as "obscure and hard to understand", "an unimportant work in 'Woman Monologues'". Therefore, it is rarely criticized as an individual work.

According to the literature review, Kazuko is a character without self-awareness and easily affected by other's opinions psychologically. However, it is extremely unusual that Dazai creates such a character without definite view of one's own. Therefore, focusing on "self-awareness", this paper analyzes *Tiyo* relating to the "Movement of Writing for Life" and the trend of "Realistic Writing" at that time.

The analysis focuses on Kazuko's psychology. Reviewing the events took place between her 12 and 18 years old, it seems that Kazuko is a "diffident" person for she always degrades herself. While, in fact, through her recollections, it is not difficult to find out that Kazuko does have a great "self-esteem" for her "talent" hiding in her innermost.

Finally, the analysis also links to the event that Dazai missed the chance to win "Akutagawa Prize". Because of the losing of Akutagawa Prize, Dazai had to change his writing style and follow the trend of that time in order to make for a living. In the letter

(1938) to his friend, he wrote in a deep grief that “the lying Dazai, though often makes people think him of, can never live on it (lying)”. Dazai’s suffering on whether he should cater to the trend of realistic writing, just coincides with Kazuko’s oppressed feeling, which came from the oppression of her “creational” talent in order to be a “female writer” at that time.

On a glimpse of *Tiyo*, it seems to tell a story about a “weak-minded literary girl” who is greatly affected by adult’s opinions. While after a careful consideration, it is not difficult to find that it, in fact, is a story about a “genius girl” with “superfluous self-awareness” who almost lost normal mental state for her view is out of the swim.

Key words : self-awareness , creation, literary trend . *Kaga No Tiyo*, the losing of Akutagawa Prize

太宰治「千代女」試論

— 語りの二面性をめぐって —

何 資宜

広島大学 社会科学部 博士課程前期

一、はじめに

昭和十六年六月に発表され、太宰治得意の「女語り」という手法で書かれた「千代女」は、「難解で謎の多い作品¹⁾」で、「一連の『女語り』小説のなかでもマイナーな存在²⁾」と見なされてきたため、「千代女」を独立した作品として論じた研究は太宰の他作に比べて数が少ないのが現状である。

この作品について、「他人の評価がもとで自分の才能が信じられなくなる者の不幸³⁾」という主題を最初に見出したのは木村小夜氏である。これに対し、安藤恭子氏はエクリチュールの境界に焦点を置き、この作品が時代背景とした生活綴方運動との接点を提示しながら、当時の家父長制的思考についても触れつつ、この作品を「少女の境界超えの不可避と不可能」を描いたものと見て、「〈少女文化〉と呼ばれる現象そのものを相対化するテキストである⁴⁾」と位置づけている。その後、千田

1 柴口順一「千代女」(『太宰治全作品研究事典』、勉誠社、1995.11.20) p.192

2 千田洋幸「千代女」の言説をめぐって—自壊する「女語り」(『国文学』、1996.6) p.81

3 木村小夜「太宰治『千代女』論—回想のありかたを中心に—」(『奈良女子大学大学院、人間科学研究科年報』6、1991.3) p.105。傍点筆者。

4 安藤恭子「太宰治『千代女』を読む—エクリチュールの境界をめぐって」(『日本文学』、1995.5) p.61～62

洋幸氏は前述した木村氏の説く「他者の評価」を男性たちの言葉に絞り込み、さらに安藤氏のいう家父長制度も考察に含めながら、ジェンダーの視点によってこの作品を考察し、和子の語る言葉はすべて「四人の男—あえていえば象徴的な『父』の言葉の模倣にすぎない」と述べ、『千代女』は、『女として』語ることが、同時に『女として』語ることの崩壊を呼び寄せてしまう、という二律背反について語るテキスト⁵」であると評価している。

作品を読むと、全篇を貫いて和子は確かに先行論の説くように「分裂状態」に陥っているように思われる。しかし、ここで疑問に思うのは、和子は本当に、「他者の評価によってしか自分の才能に自覚でき」ず、ただ「家父長制の規範を自己の内部に形づく」り、「男の言葉による評価＝規定をなんの疑念ももたずに内面化」するような、主体性のない人物として造形されているのかということである。そこで、この点を明らかにするため、ここでは〈自意識〉をキーワードにし、和子の心理状態に注目しながら分析していくことにする。

二、出来事の順序に即した考察

物語は、十二歳から、語りの現在時である十八歳までの出来事が、〈現在—過去—現在〉と配列される構造をもっており、ヒロインに関する具体的な説明もないままヒロインの心情を語るモノローグから始まる。「女は、やつぱり、駄目なものなのね。」「つくづく私は、自分を駄目だと思」うと言いながら、そのすぐ後に今度は、「また、心の隅で、それでもどこか一ついいところがあるのだと、自分をたのみにしてゐる頑固なものが、根づよく黒く、わだかまって居るやうな気が」と言う。このように、この短い冒頭部において、読者はたやすくヒロインの〈分裂した心理状態〉を読み取れるのであろう。

5 同注 2、p.84～85

と同時に、「心の隅」で自分を頼みに思っている筈の和子が、何故、他方において「きつと、頭が悪いのです。本当に、頭が悪いのです。」と潔癖と思えるほど謙虚、いや卑屈とさえ言える言葉をしきりに口にするのかという疑問も当然生じてくる。だが、読者にこの疑問を持たせたまま、ストーリーは一転して「十二の時」という過去の時間に遡る。

そこで、本稿では和子の十二歳から七年間の出来事に即して、各出来事によって和子の心理状態がどう動くのか、また和子の感じた「錆びた鍋」・「やりきれないもの」の正体と、卑屈なほど自分を「駄目」だという真の理由を明らかにしたい。そのため、ここではストーリーを次のように五つのブロックに分け、出来事の順序に即して分析することにする。

①冒頭部 語る現在（十八歳）

②小学校時代の綴方をめぐる回想（十二歳）

③岩見先生の手紙をめぐる回想（女学校三年生）

④沢田先生と叔父の綴方教育をめぐる回想（女学校四年生）

⑤収束部 語る現在（十八歳）

①に関しては本節の最初に触れたので、ここでは②から考察を始める。

②小学校時代の綴方をめぐる回想

和子が自分は「駄目」だと言い始めるのは、十二歳の時である。しかし、それは自分の綴方が雑誌に掲載された時でもあった。物語はここにおいて、十八歳の現在時から過去の時間へと転換していく。

十二の時に、柏木の叔父さんが私の綴方を「青い鳥」に投書して下さい、それが一等に当選し、選者の偉い先生が、恐ろしいくらゐに褒めて下さって、それから私は、駄目になりました。

②において、和子はこのように言い始め、その後、雑誌に掲載された自分の二つの綴方を一頁ほど語りながらも、「あんなのが、本当に、いいのでせうか。」「私には、その値打ちが無い」など、自己不信の言葉を漏らしている。しかし、この②の部分をよく読んでみると、その語りに矛盾する点がいくつか存在することに気がつくのである。

まず、雑誌に掲載された「春日町」について、和子は「そのことを正直に書いた」と言いながら、岩見先生の「長い感想文」を読んだ後では、「先生が、私にだまされてゐるのだ」と言っている。この落差はやや極端で違和感を感じさせる。これについて、木村氏は次のように語っている。

どちらも和子の意識として嘘でない以上、少なくともここには、それを書いた時の純粋な気持ちとそれに反する不信とが同時に表れていることになる。ところが、和子はどういうわけかそのうちの不信の方に自分の意識を傾けがちなようである⁶。

確かに和子が当選した作品に対し自ら「あまり子供っぽく、甘えすぎ」と言い、先生に褒められるような「値打ちがない」と語っている言葉は、まさにこの「不信」の気持ちの表れである。しかし、和子が綴方を書かないと決意したのは、この才能への不信によるのではない。それでは、この部分においての二つ目の矛盾点を提示しよう。

この後は、下手な綴方を書いて、みんなに笑はれたら、どんなに恥づかしく、つらい事だらうと、その事ばかりが心配で、生きてゐる気もしませんでした。(中略) 私の心配は、その後、はたして全部、事実とな

6 同注3、p.113

つてあらはれました。くるしい、恥づかしい事ばかり起りました。学校のお友達は、急に私によそよそしくなつて、それまで一ばん仲の良かった安藤さんさへ、私を一葉さんだの、紫式部さまだのと意地のわるい、あざけるやうな口調で呼んで、ついに私から逃げて行き、それまであんなにきらつてゐた奈良さんや今井さんのグループに飛び込んで、遠くから私のはうをちらちら見ては何やら囁き合ひ、そのうちに、わあいと、みんな一緒に声を合せて、げびた囃しかたを致します。私は、もう一生、綴方を書くまいと思ひました。

引用がやや長くなつたが、この部分においても、ある種の矛盾が存在する。これについて木村氏は「文字通り『下手な綴方を書いて、みんなに笑はれたら』というのが和子の『心配』であつたとすれば、『一葉さん』『紫式部さま』と呼ばれるようになったことは、その『心配』が『事実となつてあらはれ』たものとは言い難い⁷」と述べている。おそらく、「その後、下手な綴方を書いて、みんなに笑はれたら」という懸念も、自分が「お使ひ」「春日町」という綴方を書いてしまったことに対する強烈な自意識を示しているのではあろう。

つまり、和子は表層の感情では「あまり子供っぽく、甘えすぎ」「値打ちがない」と自分の綴方を批判する一方で、深層の部分ではそれとは裏腹に自分の才能を肯定しつつあるのではないだろうか。そもそも、二篇の綴方が雑誌に載せられ（しかもそのうちの一篇は「雑誌の一ばんはじめのページに、大きな活字で掲載」され）、選者の「偉い先生」にほめられ、友達に意地悪く「一葉さん」「紫式部さま」と呼ばれ、受持の先生には特別な扱いを受けているのであり、自分の「文才」になんの意識もないほうがむしろおかしいのである。

しかし、和子は「心の隅」では自分の「文才」を意識しながらも、口では何故か

7 同注3、p.112

執拗なほどに自己不信の言葉だけを漏らしている。この時点において、もしかしたら自分には才能があるのではないかという意識が「心の隅」に巣くう一方、やはりそのようなものはもう書けないという不安も同時に生まれてしまい、和子の〈分裂状態〉が生じてしまったのではないだろうか。「私は、もう一生、綴方を書くまいと思」ったのも、〈分裂〉してしまい、不信の方に傾きつつある和子が、自分を強引に引きずって行こうとした決意ではないかと思われる。

③岩見先生の手紙をめぐる回想

「私が女学校三年生になった時、突然、『青い鳥』の選者の岩見先生から、私の父に長いお手紙が」届いた。その手紙には、和子は「惜しい才能」を持っており、「発表の雑誌の世話をしあげる」から「もう少し書かせてみないか」、といった内容のことが書かれていた。しかし、「その裏には叔父さんのおせつかいがあつた」ことも手紙の文面からはっきり読み取れたのである。この手紙事件に関して、父と母の間に言い争いが起った。

二人のやり取りを見ると、「和子を連れて行つて、よく和子の気持を説明」すると言う父は一見すると「和子の気持ち」をよく察し、「こはがつてゐる」和子の理解者のように見える。しかし、逆に言えば、それは最初から和子の「才能」を信じていないからである。おそらく父は小学校時代の和子の二編の綴りを、ただ「一時の、もの珍しさから騒がれ」たため雑誌に載せられたものと捉え、和子の「才能」によって掲載されたものではないと考えていたのであろう。

それに対し、和子の才能が「伸びるものなら、伸ばしてやりたい気が」する母は、父に「お前たちは、和子を、食ひものにしようとしてゐるのだ。」と言われると、突然泣き出して、「父の給料の事やら、私たちの洋服代の事やら、いろいろとお金の事」を言い出した。すると「父は、顎をしやくつて私と弟に、あつちへ行けという合図」をする。和子が途中で父の合図によってその場を去ったことから分かるように、この時点において、二人のもめる焦点が和子の「才能」から和子と関係の

ない「お金の事」へと移り変わったのである。和子を「伸びるもの」として見てくれる母は、父にお金の事など言われると、「かつと興奮して」しまい、和子の「才能」そっちのけで「極端な荒い事ばかり」言い始め、結局和子を代弁しきれなくなってしまう。おそらく、和子が「悲しくな」った理由はそこにあったのだろう。

そして、興味深いのは次の場面である。その翌日叔父のことで岩見先生のところに父がお詫びに行く箇所で和子は次のように語っている。

私は何だか、こはくて、下唇がぶるぶる震へて、とてもお伺いする元気が出なかつたのです。

この手紙事件において「こはい」という言葉は二回も出てきているが、和子が「下唇がぶるぶる震える」まで「こはく」になったのは何故なのだろうか。依頼の手紙を出して父と岩見先生を困らせたのは和子自身ではなく、彼女の叔父なのである。それに関わらず、何も悪いことをしていない和子が何故「下唇がぶるぶる震える」ほどこわがって緊張しているのか。それはおそらく、和子は岩見先生と対面することによって、自分の「才能」に関して何か決定的な事を言われるのではないかと「こはがつて」いるのであろう。

だが、和子は岩見先生と直接対面することなく、ただ父の口から「自分（筆者注、岩見先生）も本当は女のお子さんには、あまり文学をすすめたくないのだ」ということを聞かされただけである。結局、「岩見先生」の評価も文壇の常識的なレベルでとどまり、自分にはいったい「才能」があるのかどうかについてはいっさい言及されなかった。そのため、自分の「才能」について強烈な自意識を持っているであろう和子は、父からそれを聞いても何か物足りないと感じ、「父の手を、つね」ったのである。和子のこのささやかな動きからも、「心の隅」における自分の「才能」へのほのかな自信を透かして見るのが可能であろう。

④沢田先生の綴方教育をめぐる回想

和子が女学校四年生の時の正月に、昔の小学校の沢田先生（生徒の受験勉強などで問題を起こしたためやめさせられ、以来暮らしが苦しくなっている）が家を訪ねてきて、和子の「惜しい才能」について触れ、「僕の新しい指導のもとに、もう一度、文章の勉強をなさいませぬか」と両親に提案した。それに応じ、和子の才能に「未練があった」母は、「沢田先生のおくらしを、少しでもお助けするため」などと言い張り、なんとか父を説得することに成功する。

だが、授業の内容は綴方の教育法などに関係なく、「侘しい、出鱈目の教育」であった。和子はとうとう我慢できず、父に沢田先生の家庭教師をやめてほしいと話した。「もともと家庭教師を呼ぶ事に反対だった」父はまた母と言い争いを起こす。しかし、ここで注目すべきなのは、和子が両親の争いを聞いた時の反応である。

茶の間の言ひ争ひを、私は勉強室で聞きながら、思ふぞんぶんに泣きました。私の事で、こんな騒ぎになつて、私ほど悪い不孝な娘は無いといふ気がしました。こんな事なら、いつそ、綴方でも小説でも、一心に勉強して、母を喜ばせてあげたいとさへ思いましたが、私は、だめなのです。もう、ちつとも何も書けないのです。文才とやらいふものは、はじめから無かつたのです。（中略）私は、茶の間の言ひ争ひを聞きながら、つくづく自分をいけない娘だと思ひました。

争いの原因は「明らかに沢田先生の出鱈目の家庭教師にある⁸」ののだが、和子は何故かまっすぐに自分の「文才」などを考え、「母を喜ばせてあげたい」が「何も書けない」などと、執拗なほどに自分を「不孝」で「いけない娘」と考え込んでいる。

8 同注3、p.111

③と④における二件の言い争いを合わせて見ると、一つの共通点が見えてくる。それは、和子が、岩見先生の手紙事件や沢田先生の綴方教育事件といった、自分と直接関係のない外的事件を執拗なほどに自分の「才能」に結びつけ、自分を責めるようにする事である。

十二才の和子は、口では何故か執拗なほどに自己不信の言葉だけを漏らしながら、先生には特別な扱いを受け、友達のねたみを受けることによって、「心の隅」にはむしろ〈自分はやはり特別な存在であり才能があるのでは〉というほのかな自信を抱いている(②においてすでに述べてきた)。こうした〈分裂した心理状態〉は③と④の事件を経てますますエスカレートし、結局和子は完全に自己の「才能」という意識に囚われ、そこから逃げられなくなってしまうのである。

そのため、極度の〈分裂状態〉に陥った和子が語った「私は、だめ」だ、「もう、ちつとも書けない」「文才やらいふものははじめから無かった」という言葉を額面通りに読んで和子の心理状態を読み解こうとする姿勢には偏りが生じる恐れがあると思われる。更に大胆に言えば、「才能」に異常なほど拘る彼女の場合は、むしろ口で自虐的で卑屈なほどの言葉を語れば語るほど、「心の隅」における「才能」への自負はますます膨らんでゆくといった方が相応しいのではないかと思う⁹。

①⑤語る現在

-
- 9 「語り手自身が語りの中の登場人物となっている話には必ず死角があり、時には語り手の意識から欠落している部分が却って話全体の主題を浮かび上がらせる」(引用は注3に同じ、p.113)ということは言うまでもないが、〈分裂状態〉に陥った彼女が、「駄目」といった卑屈な言葉をしきりに持ち出す反面、そこから欠落した「心の隅」にある「才能」への自負の方こそがこの作品に秘められたモチーフであることを述べておきたいのである。なお、この点については、「語り手としては十中八九信頼できない人物をもつ」物語の場合、作者は読者のある種の結論へ導いてゆこうとする素材を集め、物語を展開させていくが、その一方、「作者は周到な読者が語り手の操作に知的抵抗をし、何かの疑惑を抱くことを期待している」という、ロジャー・B・ヘンクルの「物語と視点—語り手を、時には話をも疑え—」『小説をどう読み解くか』(南雲堂、昭和61.6.20)を参照。傍点筆者。

ここにおいては、もう一度作品の冒頭部を取り上げながら収束部と合わせて、主人公の語る現在を考えていきたい。

まず、本題に入る前に、昭和期の児童雑誌『赤い鳥』について少し触れておきたい。児童雑誌『赤い鳥』は、大正七年七月鈴木三重吉によって創刊され、昭和四年一月号を出したのち、財政難のため休刊となったが、昭和六年一月になって復刊、十一年十月三重吉追悼号を出してその歴史を閉じた。この『赤い鳥』運動について、中内敏夫氏は次のように語っている。

『赤い鳥』運動の研究は、その歴史をこの休刊期をなかにはさんだ前期と後期にわけておこなうのが、これまでの定石である。同誌を通覧していくと、この昭和四年以前と六年以後とでは、掲載されているこどもの投稿作品に顕著な相違がみとめられるからである。その相違は、ロマン的、唯美的なものから、リアリスチックなものへの変化であると一般には要約されている。¹⁰（下線筆者、以下同じ）

『赤い鳥』誌を子どもの文章表現指導誌としておしだそうとする構想が初期において全くなかったわけではないが、それが運動の主軸となつて、豊田正子の『綴方教室』に代表される子どもの綴方作品が誌上に大量に姿を現してくるのは後期に入ってからである。¹¹

加えて、『赤い鳥』運動と太宰の「千代女」の接点について、安藤恭子氏は次のように述べている。

10 中内敏夫『生活綴方成立史研究』（明治図書、1970.11）p.361

11 同注 10、p.366

「赤い鳥」は三重吉の死によって昭和十一年終刊となるが、その綴方運動の教えを受けた大木顕一郎の指導のもとに成る豊田正子の綴方が、『綴方教室』（昭和十二年八月、大木と清水幸治の共著として出版）にまとめられるや一躍脚光を浴び、舞台化・映画化と他のメディアにまで綴方は波及する。この豊田正子が「寺田まさこ」を、また昭和十五年のベストセラー・『煉瓦女工』を書いた野沢富美子が「金沢ふみ子」であることも、読者はたやすく想起しただろう。また、「和子」という名から、「赤い鳥」の綴方・自由詩欄で活躍した「阿部和子」を想起する読者もいただろう。¹²

以上の二つの論説を念頭に置きながら、綴方について語る沢田先生と叔父の言葉を見てみよう。沢田先生は「あなたには誠実が不足してゐる、いかに才能が豊富でも、人間には誠実がなければ、何事に於いても成功しない」と「徳育¹³」に注目しながら、「てにをはの使用を確実にしなければならぬ」「文章には描写が大切だ」と「小さい手帖を見ながら」語っている。また、「まづ日記を書け、見たところ感じたところを、そのまま書いたら、それでも立派な文学だ」と言う叔父も、まさに後期『赤い鳥』運動における綴方教育を踏襲しているように思われる¹⁴。

しかし、和子は沢田先生を「ぼけていらつしゃる」と思い、最初から相手にしていないし、また「見たところ感じたところを、そのまま書く」という叔父の綴方教育も「いい加減に聞き流して」いる。

12 同注 4、p.58

13 三重吉『綴方読本』では、綴方による「人間性の向上」が説かれている。

14 「(前略) どうか文章の長短にかかわらず、空想で作ったものでなく、ただ見たまま、聞いたままを、素直に書いた文章を、続々お寄せくださいますようお願い致します。」と、『赤い鳥』の毎号「巻末」の「募集作文」の欄には記されているという。—ただし引用は注 10 中内氏の著書による、p.388

「いまこそ私は、いつか叔父さんに教へられたやうに、私の見た事、感じた事をありのままに書いて神様にお詫びしたいと思ふのですが、私には、その勇気がありません。いいえ、才能が無いのです。それこそ頭に錆びた鍋でも被つてゐるやうな、とつてもやり切れない気持ちだけです」と和子は言う。おそらく、「蓮葉な小説ばかり読みふけ」って「みだらな空想をする」和子の感じた「錆びた鍋¹⁵」とは「見た事、感じた事をありのままに書」くという綴方教育法なのではないかと思われる。こういう子供向けの綴方教育法に対する和子の抵抗も、冒頭部の「もう、来年は、十九です。私は、子供ではありません」という言葉に繋がると考えられる。

その後、和子は「何も書けません」と言いながらも、「このごろは、書いてみたいと思」い、「眠り箱」という小説を書いた。だが、この小説は叔父に「半分も読まずに手帖を投げ出」され、「文学といふものは特種の才能が無ければ駄目なものだ」と言われた。それゆえ、和子はまたも卑屈に自ら自分を「低能の文学少女」と決め付けてしまったのである。

しかし、和子の「心の隅」に巣くっていた才能への自負が本当に叔父のこの言葉によって全部消え去ったのか、それならば、何故最後において岩見先生に「七年前の天才少女」と自称して手紙を出したのだろうか、といった疑問が生じてくる。そして、これらの疑問の解決は、表題の「千代女」をどうとらえるかにかかってくると思われる。

ここで、少女時代の千代女の生涯について少し触れておきたいと思う。

加賀の千代は、中流家庭に生まれ、十二歳（和子の「青い鳥」入選と同じ年齢）のころ大睡から俳諧の手ほどきを受け、十七歳で支考にまみえ、俳壇にデビューす

15 三重吉は『赤い鳥』の創刊当時は、「自然主義を『老いたる圧政者』として退け」るが、「後期になると、もう『赤い鳥』誌の排除することのできない主軸になっていったこれらの「自然主義」、「リアリズム」作品は、三重吉にとって、自分の手に直接なったものではない点においてなお本意なものでありながらも、客観的には否定し去ることのできない」ものとなっていたのである。同注 10、p.364～383

るきっかけとなったが、千代の作で初めて撰集に見えるのは、十八歳（和子の現在の年齢）の時に詠まれた「池の雪鴨あそべとて明てあり 女ちよ」という一句であった。

若い千代の生家にしろ、決定的な事件が起った年齢にしろ、不思議にも和子の人物設定と合致している。おそらく、実在の千代と主人公の和子とを対比させようとしたのは太宰の意図的な創作であろう。ストーリーの最後の、母の口を借りて語られた千代のエピソードはわずかに数行で終わっているが、この作品の表題になっていることからその重要性を看過することはできないだろう。

生涯における決定的な出来事の起こった年齢が一致しているにもかかわらず、和子は、「私は千代女ではありません」と語った。両者の違いが一体どこにあるのかは、次の引用によって明らかになる。

千代が華々しくデビューした享保期の俳壇は、いわゆる俳諧の低落期に当たる。芭蕉歿後、江戸では其角末流の洒落風や江戸座の比喻体が奇警を競い、上方では淡々の衒気たつぷりな浪花ぶりが俗耳を惑わしていた。一方、地方俳壇には、支考の美濃派や伊勢風が勢力を張つて、その平俗な俳風を大きく伸ばしていた。

（中略）

金澤より三里南に松任と申所、表具屋の娘に千代と申し、美婦生年十七歳、去年歳暮よりふと發句をはじめ、あたまからふしぎの名人、三越の間、是沙汰にて御座候。

（中略）

そして、芭蕉歿後美濃派の一風を立て、野心的に自門の勢力拡張に努めていた支考が、この金の卵を手中に収めて、自派宣伝の有力な武器にしようと図つたのも当然であり、斧正を請うて来た千代への返事にも、

「かならずや人になをして御もらひあるまじく候」ととくに念を押している。この支考のPRによつて、「稲妻」の句は、『水の友』（享保九年刊）、『文月往来』（同十一年刊）などにも採録されて、千代の俳壇にデビューするきっかけとなつたのである。彼女を世に出した第一の功労者は支考であつた。（中略）、この俗受けのする趣向が、享保以降低俗化の一途をたどる俳壇の時流に投じて、やがて一代の人気作家を生む機縁ともなつたのである。¹⁶

引用が長くなったが、下線の部分に注目して欲しい。和子と千代の相違は、主に二つにまとめられよう。まず一つ目は、千代が俳壇にデビューした時代背景において、その「俗受けの趣向」が「低俗化の一途をたどる俳壇の時流に投じ」たため、「一代の人気作家を生」んだという点である。そして二つ目の相違は、「去年歳暮よりふと發句をはじめ」という箇所に関わってくる。これについて、再びテキストに戻って〈千代のエピソード〉を見てみたい。

……千代は一晩ねむらずに考へて、ふと気が附いたら夜が明けてゐたので、何心なく、ほととぎす、ほととぎすとして明けにけり、と書いてお師匠さんにお見せしたら、千代女でかした！

……炬燵にはひつて雑誌を讀んでゐたら眠くなつて来たので、炬燵は人間の眠り箱だと思つた、といふ小説を一つ書いてお見せしたら、叔父さんは途中で投げ出してしまひました。

16 丸山一彦「加賀の千代」『日本女流文学史 近世近代篇』（精興社、昭和44.3）p.92～93

引用文中の傍点部はよく似ていると思われる箇所であり、下線部は対照的であると思われる箇所である。この引用文は太宰が両者を対比させようとした意図が最も明確に表れている箇所だと思う。下線部を見ると分かるように、一方は「何心なく」表現したものであり、他方は「炬燵は人間の眠り箱だと思つた」というように「空想」を加えて表現したのである。そして、この違いにより二人の評価の結果も変わってくるのである。

つまり、「俗受けの趣向」が「低俗化の一途をたどる俳壇の時流に投じ」「一代の人気作家」となった千代（また、「世間の大評判」になった「金澤ふみ子」、「先生の教へをよく守つた」「寺田まさ子」も時流に乗った）と違い、「空想」が加えられた和子の作「眠り箱」は、当時流行った「見た事、感じた事をありのままに書」くという綴方運動の風潮に応じていないのである。これも、「見たところ感じたところ、そのままに書く」と主張した叔父に不評であった所以である。

前にも触れたが、和子は「ありのままに書」くことに抵抗感を覚えた。しかしその一方で、時流に合わせなければ「女流作家」にはなれないというのも現実なのである。そのため、「みだらな空想を」し、「芸術の道を精進」しようとした和子は、「ありのまま」の時流に合わせるか或いは自分の「空想」を生かすかと悩むようになってしまった。そして「どうしたら、小説が上手になれるだらうか」という疑問も生じてきた。だが、この疑問が生じてくると同時に和子の心の中にはその答えも出てきたはずである。

沢田先生と叔父にあれほどしつこく教えられたのだから、時流に合わせれば小説は好評を受け、雑誌にも載せられるということが和子には分からないはずがないからである。しかし、「見たまま、感じたままを、素直に書く」のには、才能よりも観察力と表現力のほうが大事とされている¹⁷のである。おそらくその点で、「心の

17 生活綴方運動は、「昭和五、六年以降、綴り方を書くことを通じて生活を認識させ、表現力を学ばせようとした」運動である。また、「見たまま、感じたままを、素直に書く」というのは、その運動の趣旨を端的に表現した言葉である。『日本近代文学大事典 第四巻事項』

隅で」自分には「一ついいところがある」と自負している和子は、「ありのまま」を描くという綴方指導法には納得できないのである。和子は、自分の「才能」を生かして「空想」するか、時流の「ありのまま」を描く綴方運動に合わせるかと悩んだあげく、「自分で自分が、わからなくなつて来」たのである。

とは言え、和子はやはり最後の最後においても「心の隅」に巣くっている「才能」には未練があり、結局十八歳の千代のように文壇にデビューしたいと思い、岩見先生に「七年前の天才少女をお見捨てなく」という手紙を寄こしたのであろう。ちょうど、「斧正を請う」ために支考に手紙を出した千代のように。小説の最後が、「私は、いまに気が狂ふのかも知れません」という一文で締めくくられているのは、自分の才能への自負と不安、時流への抵抗感と迎合との間で、彼女が揺れ動いているためであろう。

繰り返しとなるが、「俗受けの趣向」が「低俗化の一途をたどる俳壇の時流に投じ」た千代は、「芭蕉歿後美濃派の一風を立て」ようとした支考に恵まれ、ついに「一代の人気作家」となった。それに対し、「心の隅」で「才能」を「たのみにして」いる和子は、「いかに才能が豊富でも、人間には誠実がなければ（＝「見たところ感じたところを、そのまま書」くという時流に応じなければ）、何事に於いても成功しない」という沢田先生の言葉通り、とうとう「女流作家」にはなれなかった。ここにおいて、和子に残された道はたった一つ、自分の思い（「空想」）を圧殺して時流に合わせることである。恐らくこれが和子の「私は千代女ではありません。」という一句に秘められた辛い心情であろう。この千代の〈エピソード〉が作中に描かれ、題名にもなったというのはおそらく太宰のアイロニーであったと考えられよう。

三、終わりに

「心の隅」で「どこか一ついいところがある」と期待を持ち、「空想」の小説を試みようとした和子のこの思いは、当時の「ありのままに書」くという「流行」に合わず、結局「女流作家」になろうとする彼女に残された唯一の道は、自分の「才能」への意識を懸命に抑えてまで「時流」に合わせることになる。「空想」を発揮するか、或は「流行」に合わせるかと悩んでいた和子の姿は、実に作家太宰自身の姿と重なっているように思われる。

昭和十年の第一回芥川賞に異常なほどの自信や期待を抱いた太宰¹⁸にとって、予想外の落選はかなり大きな打撃を与えた筈である。「なるほど、道化の華の方が作者の生活や文学観を一杯に盛つてゐるが、私見によれば、作者目下の生活に厭な雲ありて、才能の素直に発せざる憾みあつた。」という選者の川端康成の評に「不愉快」を感じながらも、「虚構」（「空想」）の作品を書きつづけた太宰は、小説の書き方に彷徨うようになっていた。

そのため、川端の評を読んだ直後、自分の師である井伏鱒二に「小説のはうも、ゆつくりかまへて、いいものを創らう、と思つてゐたのですが、だめでした。このぶんなら、また、私、方針を変えなければなりませんまい¹⁹」という手紙を送ったり、

18 「僕、芥川賞らしい。新聞の下馬評だからあてにならぬけれども、いづれにせよ、今年中に文芸春秋に作品の筈（筆者注、授賞作家には当時の金で賞金五百円と、今後の作品の発表の場として『文芸春秋』への掲載が約束された）。」昭和十年七月三十一日小館善四郎宛の書簡。一ただし、引用は『太宰治全集第十一巻』、筑摩書房、昭和 52.6.30 による。p.38。なお、「芥川賞落選問題」や麻薬中毒により、「文壇から追放され」「武蔵野精神病院」に入れられるまでの一連の経緯については、北垣隆一「太宰治略伝」『太宰治の精神分析』（北沢図書、1974.12.9）を参照。

19 昭和十年十月三十一日井伏鱒二宛の書簡。一ただし、引用は注 18 に同じ。p.52

「苦しいけれども、やはり、人らしく書きつづけて行くのがほんたうであらう²⁰」
といったものを随筆に書き込んだりしていた。だが、一年も経たないうちに、今度は「ドンキホーテ。ふまれても、蹴られても、どこかに、小さい、ささやかな痩せた『青い鳥』みると、信じて、どうしても、傷ついた理想、捨てられませぬ²¹」といったようなものを書いて井伏に送ったり、少し後だが、随筆にはやはり「文壇常識をやぶなければいけない」「私たちは、全く、次の時代の作家である²²」といったような記述を残している。

このように、第一回から第三回にかけての芥川賞に異常な期待を託した太宰²³は、この時期において、「どうしたら、小説（フィクション）が上手になれるだろうか」という疑問に悩まされているようである。昭和十三年山岸外史宛の手紙に次のような記述がある。「むかしのニヤケタ、ウソツキの太宰もなつかしいが、あれでは、生きてゆけません²⁴」。この記述には太宰の辛い決意が伺える。「ウソツキ」では「生きてゆけ」ないという太宰の眩きには、「空想」（虚構）を懸命に抑えてまで「流行」に合わせようとした「和子」の姿が隠されているように感じられる。

「千代女」は一見すると、先行論の説くように「何にも書けない低能の文学少女」が周囲の大人たちに振り回されている物語であるに見えるが、その裏にはむしろ逆に、「自意識過剰²⁵」な「天才少女」が「文壇常識」により「気が狂ふ」ほどに悩

20 太宰治「碧眼托鉢」。ただし、引用は『太宰治全集第十巻』、筑摩書房、昭和 52.2.25 による。
p.63

21 昭和十一年九月十九日井伏鱒二宛の書簡。一ただし、引用は注 18 に同じ。p.108

22 太宰治「創作余談」（日本学芸新聞、昭和十二年十二月号）。一ただし、引用は注 20 に同じ。
p.96.98

23 太宰は昭和十年八月二十二日、当時芥川賞の選者の一人である佐藤春夫に会って、弟子の礼をとり、またその後しきりに手紙を送ったりして、中には「お笑ひにならずに、私を、助けて下さい。佐藤さんは私を助けることができます。」という記述も記されている。昭和十一年二月五日佐藤春夫宛の書簡。一ただし、引用は注 18 に同じ。p.64

24 昭和十三年十月十七日山岸外史宛の書簡。一ただし、引用は注 18 に同じ。p.135

25 「ぼくの自意識過剰もこのごろ凝然と冷えかたまり、そろそろ厳肅という形態をとりつつあ

んだあげく自分の思い(「空想」)を圧殺するまでの姿が物語られているのであろう。

テキスト：

【初出】「千代女」（『改造』昭和十六年六月）

* 「千代女」の本文の引用は、筑摩書房版『太宰治全集第四巻』（昭和四十六年6月）による。下線、傍点はすべて筆者による。

参考文献（年代順）

- 1、丸山一彦「加賀の千代」『日本女流文学史 近世近代篇』、精興社、昭和 44.3
- 2、中内敏夫『生活綴方成立史研究』、明治図書、1970.11
- 3、北垣隆一『太宰治の精神分析』、北沢図書、1974.12.9
- 4、太宰治「碧眼托鉢」『太宰治全集 第十巻』、筑摩書房、昭和 52.2.25
- 5、太宰治「創作余談」『太宰治全集 第十巻』、筑摩書房、昭和 52.2.25
- 6、太宰治 書簡『太宰治全集 第十一巻』、筑摩書房、昭和 52.6.30
- 7、「生活綴方運動」『日本近代文学大字典 第四巻事項』、講談社、昭和 52.11
- 8、ロジャー・B・ヘンクル「物語と視点—語り手を、時には話をも疑え—」『小説をどう読み解くか』、南雲堂、昭和 61.6
- 9、木村小夜「太宰治『千代女』論—回想のありかたを中心に—」『奈良女子大学大学院 人間科学研究科年報』6、1991.3
- 10、安藤恭子「太宰治『千代女』を読む—エクリチュールの境界をめぐる—」『日本文学』、1995.5
- 11、柴口順一「千代女」『太宰治全作品研究事典』、勉誠社、1995.11.20
- 12、千田洋幸『千代女』の言説をめぐる—自壊する『女語り』『国文学』、1996.6

るやうだ。」と自ら書いているように、この「自意識過剰」というのは太宰自身にとっても長年の問題であった。昭和十年八月三十一日今宮一宛の書簡。引用は注 18 に同じ。